

生というもの ほか十四篇

イダ・ビターレ
三角 明子 訳

生というもの

縁に身を置く
聖餅を授かる
聖歌をうたう
無駄に傷つく
自由意志を廃する
天変地異を承認する
孤独に寄り添う
空想を否定しない
暴風にさらされゆっくり進む

密着から広大なるものへ行く
不透明から閃きへ
委任から自由な夢へ
日々のつましさに身をささげる
一時間ごとに死ぬのなら
毎夜ふたたび始める
相違から同一へと飛ぶ
見晴台と地下室に感嘆する
自傷する自罰する身をなげうつ
引きのばされた魂の探求に身をおく
影のあいだに奇跡を準備する

そして死の味がするものを生と呼ぶ。

Llamada vida

11の世

わがものとして受けいれるのは確実にして不定、
光に照らされたこの世だけ。

讚えるのはこの世の永遠の迷宮と

確かな光だけだ。隠れていても。

目覚めていても、夢のあわいでも

踏むのはこの世の重々しい大地だけ。

そしてわたしのなかで花開くのは

この世の忍耐だ。

この世は音のない周期をもっている、

辺獄かもしれない

そこでわたしがわけもわからず待つのは

鎖を解かれた

雨だ、火だ。

ときに光が変わる、

すると地獄に。

ときには、ごく稀にだが、

楽園にも。

誰かが扉をうすく開け

彼方の約束を、継承を

かいま見ることができるかもしれない。

わたしが棲むのはここだけ

期待するものも。

驚きはじゅうぶんにある。

わたしはここにいる

いつづけて

ふたたびうまれたい。

祖母

緑を帯びた光のなか、緑を帯びた香りに包まれ

焼けた紙のように黒いドレスで

揺り椅子に座る祖母は鏡の

奥に映っている。

あそこに座ったまま揺るがない。軋む。

幾度かの結婚も家も

苦悩の機会も、語られたものも、

家族の口にしこしすつ血の味を与えた

乾いたスカートの当て布も気化していく。

度重なる戦争、死んだちびさんたち、

その後、祖母を喪に服させた人々も。

そして語ろうとはしなかった恋も

苦難の年月も、ひからびた肌であえなく死んだ

豪奢逸楽のしずくも。

こんな調子で夕方が来るたびすすられたおやつも

瞬時に忘れ去られ。

天然痘には免疫があった。

貪欲を知らなかった。

婚家にかかわるシチリア島も

モンテビデオの幾多の街角も見ることがなかった。

何十年ものあいだ祖母には女ともだちひとり

ちっぽけな郷里の思い出だけでこと足りた。

桃のイタリア語名を思いだす

ことだけに執着していた。

味と同様もう忘れていたのだ。

生あたたかいその膝のうえに

祖母の穏やかさを育んだ

もうひとつの秘密の真実が生あたたかく眠っていたことをわたしは知っ

てる。

ゆううつなヒレ肉でできたカーテンのしたのあかり

わたしはもうひとつの揺り椅子に座り何年も祖母に向かいあっていた

が結局届かなかった。

Abuela

プログラム

I

思い出せ、はっきりゆっくり、水を。

鳥の声を聴け。

おそれをかろうじて歌っているのか、

それとも希望を示している？

薔薇のもとにきて薔薇を想え。

人間にこころを惑わされるな。

あれはひとりで大丈夫だから。

自力で

ナイフを準備するから。

II

不死鳥の最期

見なさい、死すべき定めを忘れず
生長する、がちっぽけな、種を。

ひとにはげしく蔑まれることに錨をおろせ、
世界が探しているものと食い違い、無視せよ、
そうすることで通過するために、もう怒りもなく、
おまえの旗を吹きおろす風もなく。

III

瞠目せよ

世界のすべての片隅に
櫂の発芽に、それとも無気力な顔に。
さらに一度おまえは幻惑されるだろう
なければ空中におのれの過ちを探すことだろう。

おまえはまだ人生の虜囚なのだ。

Programa

ほんとうじゃなかった
あの物語めいた飛翔は。
でもわたしたちはうつくしいもののように
信じるふりをしていた。
不死鳥が黄金の声明をあげ
金に
劇場の暗いばら色に
力ない黄昏、
いつわりの空を
やってくるのを見つめた。
射すような忍耐で
その飛翔を追っていた。
日に齧られた不死鳥は
とつぜん
おのれの発した蒸気によって
清浄な夜の前に
屈服していった。
わたしたちは火災の
顛末を見守っていた
栄光のなかに写しとられた

不測のものを。
しまいに不死鳥は大地へと
落ちていった、
灰の飛翔の
影のあいだに。
羽ばたきひとつ、
わたしたちには見えなかった。

Final de fenix

女王スフィンクス

蛇の箱のうえに立ち
女王は、天使、それとも悪魔たちに
掲げられ、妖術のあとをついていく。
爪先立ちで踊れるようにと
眼前にはピンの道が開けていた。
背後にはかのひとを守る、それとも殺す一振りの剣が。
今世紀、禁断の鳥たちが住む
森は日ごとに燃やされ
あてのない旅の騒ぎが終わる。
得体の知れない敵に囲まれた

一匹の蠍が死を差し出すだろうか、
それとも毒針と
刺だけに包まれるのだろうか？
かのひとが狂気の笏と
世界の満ち足りたイメージを
吹き飛ばすに足りる火薬を持ったままだとわたしは信じる。

Esfinge reina

亡命

……そのあいだそこを行ったり来たり。
フランススコ・デ・アルダナ
ここにもあそこにもいる。立ち寄っただけで
どこにもいない。
おのおのの地平線。ひとつの燠が引き寄せる場。
どの裂け目に向かうこともできるはずだ、
羅針盤も呼び声もない。
勇猛な太陽、それとも霜が焼く
沙漠を渡り

かれらを現実に戻し

実体と牧草で成り立つものに変えるだろう

果てない無窮の野を渡る。

まなざしは尾の一振りすらするすべもなく

犬のように横たわる。

横たわる、またはあとずさる、

返してくれる者がなければ

大気によって塵と化す。

血には戻らず、しかるべき者に

届きもしない。

融けてゆく、かくも孤独に。

順化

はじめにきみは引きこもる

しおれる

渇きのうちに魂をうしなう

理解できないもののなかに

いのちの水に届こうとする

ちいさな葉を

最小の膜を照らそうとする。

花の夢は見ないこと。

きみは空気に窒息する。

砂が

朝には君臨し

緑なすものが死に

不毛な黄金がたちのぼるのを感じる。

だが、砂にもわからないうちに、

どこかの縁から

ひとつの心が心を寄せ、きみをさっと

濡らす、祝福に満ち、

雨があがり

きみが松のひくい枝を

こするときのように。

すると

無音に対し

きみは音楽に包まれて立ちあがる、

乾いたものに対し、湧きだす。

足し算

馬と騎手はすでに二頭の動物である

一足す一、とわたしたちは言う。そして考える
林檎一個に林檎一個。
コップ一杯にコップ一杯。
つねに同じもの同士を。

どんな違いがあるだろう
一足す一が清教徒一人と
ガムラン一曲なら。
ジャスミンとアラブ人なら。
尼僧と断崖なら。
うたと仮面、
もういちど守備隊と乙女、
だれかの希望と
ほかのだれかの夢なら。

任務

ことばひとつごとに荒野を開く、
おのれを開き、意味深い開口部に目をこらす
燠のありかを耕そうと骨をおる
それから燠を消し、焼かれたものの不平をしずめる。

Tarea

空気中に

ゼラニウムの庭と空気。
柵のそばで草を食むようにと
舌のしかかっている雄牛を連れてゆき
声をかける。ここにいなさい、緑の、
でもこの世の牧草を食べなさい。
それから歌いなさい、できるなら、
誰にも聞かれないときに
言えずにいることを。

Sumas

En el aire

緩慢な障害

この夕刻の詩が

はるか深みに保護された

磁石へと落ちる鉦石だったなら

だれかの飢えに

必要な果実だったとしたら

そしてこの飢えと詩が

時宜を得て熟したのだとしたら

おのれの翼によって生きるあの鳥だったとしたら

この鳥のいのちを支える翼だったとしたら

ちかくに海があり

黄昏の鷗たちの叫びが

待望の時刻を告げるとしたら

もし今日のシダを

——時間の化石を保存するものではなく——

わたしの言葉が緑にしているのだとしたら

もしすべてが自然で優しかったならば……

しかし不確かな道程は

正確な意味もなくまき散る。

わたしたちは流浪者になった

荒野には輝きがなく

この詩のうちには方向もない。

蝶、詩

宙に浮いていた

不確かでかよわく、詩が。

やはり不確かに

美しくも不吉でもなく

夜の蝶がやってきて

紙の屏風に迷いこんだ。

あのほつれてたよりない言葉の帯は

蝶とともに霧散した。

どちらも戻ってくるだろうか？

夜の一瞬

光を避け

隠れた蝶のほかに

さらに不吉でありうるものを

もう書きたくないと思うときに。

Obstáculos lentos

さいわいのように。

Reunión

Mariposa, poema

正義

つどい

かつてことばの森があった
待ち伏せることばの雨、
叫びあうときも無言のときもある
ことばの集会、

農夫は干し草の寢床で眠る。
海綿動物採りは
ふわふわの収穫物のうえで休む。
きみも眠るか、緩慢に浮揚し
書かれた紙の上に？

Justicia

弱々しい轟音、
微妙な、ああ微妙な微妙な相違もありうる
虹色の口音、
かつてプロとコントラがあった
はいといいえも、
葉の一枚一枚に声をまとった
増殖した木々。
これでもう絶対、いわゆる
沈黙はない。